

欧陽修の詩（承前）

佐藤 保

五

あしかけ六十六年にわたる生涯を送った欧陽修は、まだ若い二十五歳のときに颯爽と西京（洛陽）の諸公の前に登場して以後、途中で大きな政治的挫折を三度経験しながらも、最後に念願の潁州（安徽省阜陽県）の地に引退して死を迎えるまで、北宋中期の士人社会においてたえず人びとの目をひき、かれの言動は人びとの賞讃と、そしてまたより多くは反撥とをまき起こした。理由はほかでもない。すでに一般によく知られていることであり、この小論の冒頭の部分（前号掲載）でも簡単にふれたことであるが、かれが当時の人びとの注目の的となったのは、文学・史学・経学等の学術の分野と政治の分野におけるかれの巾広い活躍によるものであり、しかもそれぞれの分野において均しく当時の指導的な役割を、かれがはたしたからである。

このような、欧陽修の学術上の成果、並びに政治上の行動について述べたものに、劉子健の『欧陽修的治学和從政』の詳論がある。その名が知られている割には専論の少ない欧陽修研究の文献の中で、同書はほとんど唯一と言ってよい欧陽修の全体像を把握しようとする総合的な論考であるが、同書の「引言」において、欧陽修の生きた北宋中期——第四代の天子仁宗の長い治世年間と次の天子英宗の短いそれ——が、「学術の上でも、儒教思想の上でも、そして政治の

推移の上においても、すべて前を継承し後を開くという影響を及ぼした」と、それがいわば時代の重要な転換期に当たっていたことを指摘する。またその時期が、ちょうど宋開国以来の高官顯臣たちの政治的支配に対して、欧陽修もその一人であった科挙出身者を中心とする若い士大夫たちの地位が、しだいに高まってきつつある時でもあったと述べている。⁽³⁾ 後述のごとく、この時期の政治改革の中心人物であった范仲淹（九八九—一〇五二）が書き記した「天下の憂いに先だちて憂え、天下の楽しみに後れて楽しむ⁽⁴⁾」という名高い言葉も、実は新たに政治舞台に登場した新進士大夫の自覚と責任とを表明したものにほかならなかったのである。欧陽修の政治的な行動はもとよりとして、詩文の創作や学術活動のすべてが、当時の時代の空気と密接に関連していることは、いまさら言うまでもない。

ここで、詩の検討をするという本論の目的から少しはずれるように見えるかもしれないが、当時の時代背景をより明確に、把握しておくために、一つの興味深い指摘を紹介しておこう。それは簡単に言えば、欧陽修が北宋中期に抬頭してきた江西出身の新興官僚群の中心人物の一人であったという指摘である。このことは青山定男「五代宋に於ける江西の新興官僚⁽⁵⁾」によって先ず指摘され、青山論文をふまえつつ更にそれを発展させて、当時の複雑な政治状況を「南人」と「北人」の対立という観点から整理するのが、劉子健の前掲書である。劉説は、北宋中期の政争、とりわけ欧陽修の最初の挫折の原因となった范仲淹派と呂夷簡（九七七一—一〇四二）派の対立を、次のように四点にわたって整理する。⁽⁶⁾

(一) 長江以南の新官僚群がしだいに抬頭してきたのが、黄河流域の旧官僚群と磨擦を生じた。すなわち、いわゆる南人と北人の争いである。

(二) 南人と北人の背後には、経済的社会背景の違いがあった。南方新官僚の大半は中型地主の家庭から出て、一躍して職業的な士大夫となった。北方旧官僚の大半は大型地主の家庭の出であり、互いに婚姻関係を結び、官界に長くいて、すなわち、あるものは「世家」を自称したといわれる状況であった。

曰南人と北人の背後には、また學術思想の違いがあった。南方の新官僚群の中で、若干の指導的な人物は學問研究を提唱し、學校を開いた。そして、政治理論と理想とをもち、議論を好んだ。それがやがて「慶曆の正學」となり、漢代や唐代のとき以上につよく儒家精神の發揚を主張することになった。一方、北方旧官僚群の學術思想は、一般的に言えば、保守的であった。前代および北宋開国以来の伝統的な制度と解釈を繼承し、大きな變革に反対した。

四一〇三六年の政争（すなわち、景祐三年の范・呂兩派の対立——筆者注）の様式は、諫官の名士が、政權を執っている行政官を攻撃するというものであった。北宋の初期には、諫官はあまり多くは發言してない。それに皇帝自身もしばしば宰相の任に当たったので、朝政はおおむね平静で、比較的波風が立たなかった。だが、一〇三六年の党争以後、議論の風潮がいったん起つてしまうと止めようがなくなり、政情は日ましに混亂していった。

このみことな要約にいささか贅言を加えるならば、歐陽修は實際には父の歐陽観（九五二—一〇二〇）の任地であった綿州（四川省綿陽県）で生まれ、四歳で父を失ったあとは母とともに叔父の歐陽暉（九五九—一〇三七）をたよって隨州（湖北省隨県）で生長したのであるが、その祖籍が廬陵（江西省吉安市）であったために、江西新興官僚の一人に数えられるのである。ほかに、かれの弟子の曾鞏（一〇一九—一〇八三）や王安石（一〇二一—一〇八六）がおり、実は歐陽修と范仲淹の才能を見出した晏殊（九九一—一〇五五）もまた、江西官僚——撫州臨川（江西省臨川県）の出身——の一人であった。

一方、范仲淹の出自は江西とは何の関係もないが、祖籍は蘇州呉県（江蘇省蘇州市）のまぎれもない南人である。かれは徐州（江蘇省徐州市）に生まれ、二歳で父を亡くしたあと、再婚した母の嫁ぎ先の淄州長山（山東省蒙陰県）で育ち、大中祥符八年（一〇二五）に進士に及第した。歐陽修にとっては十八歳年上の大先輩にあたる。しかしながら、兩者ともに小官僚の家に生まれて早くに父を亡くし、幼少年期を苦學して過したという境遇は、奇妙に一致し、年令の違いこ

そのあるものの、お互い相手の思想や感情をよく理解し合えるところがあつたに違いない。議論好きで剛直な性格をもつという点でも両者は共通していたし、詩文に対する考え方もよく似通つていた。⁽⁷⁾

さらにつけ加えるならば、天聖五年（一〇二七）、晏殊の要請を承けて范仲淹が南京応天府（河南省商丘市）の府学——南都学舎——で学問を講じたとき、そこで学んだのが、のちに欧陽修と同じ年に進士に及第した石介（一〇〇五—一〇四五）である。石介は北の兗州奉符（山東省泰安市）の出身であつたが、范仲淹を通じて南人グループの最も激越な論客になつた。石介についてはまた後にふれることになる。

さて、以上のようなことがらを念頭におきながら、欧陽修の生涯を幾つかに分けて、それぞれの時期の詩作の状況を見ていこう。

六

欧陽修のように政治と深くかかわつていた人の生涯を分けるには、やはりかれの政界における進退に従つて考えていくのが便利である。節目となるのは三つの大きな挫折と政界からの引退であるが、いま次の六つの時期に分けてみたい。⁽⁸⁾

第一期—景祐三年（一〇三〇）の峽州夷陵（湖北省宜昌市）の県令に貶されるまでの時期。かれの三十歳以前である。

第二期—夷陵の県令に貶された時から、「慶曆の新政」に失敗して、慶曆五年（一〇四五）に滁州（安徽省滁県）の知州に左遷されるまでの時期。三十歳から三十九歳まで。

第三期—知滁州となつてから、再び都にもどつて政界の中枢につく至和元年（一〇五四）までの時期。三十九歳から四十八歳に至る第二次の挫折の期間であり、醉翁という号はこの時期につけられた。

第四期―至和元年(1151)に都にもどってから、かつての「慶曆の新政」の同志とともに中央政界で活躍し、治平四年(1154)〇六七)に第三次の挫折に逢い亳州(安徽省亳縣)の知州に出るまでの時期。四十八歳から六十一歳までかれの生涯で最もはなばなしい時期であり、嘉祐六年(1061)五十五歳のときには参知政事に就任した。

第五期―知亳州として都を逐われて以来、政界引退を再三上奏してようやくそれが許され、熙寧四年(1071)に潁州に引きこもるまで。六十一歳から六十五歳までの最後の挫折の期間。

第六期―潁州引退後、翌熙寧五年(1072)に病死するまでの短い期間。六十五歳から六十六歳にかけてのあしかけ二年間。

欧陽修の詩作品が、いまほぼ全て『文集』の「居士集」一四巻と「居士外集」七巻に収められていることは、すでに前号拙論の第一章で述べた。⁽⁹⁾収録の様式は、両集ともまず作品を大きく「古詩」と「律詩」とに分け、それぞれさらにほぼ制作年に沿った排列を施している。そのことは両集の目録の詩題下に制作年の注記があること――「居士外集」は目録の巻次の下に、さらに収録作品の年代的な範囲を注記する――からわかるのであるが、注記が必ずしもすべての詩題に施されているわけではなく、また、注記の年代も細かに検討してみると問題がないでもない。⁽¹⁰⁾

しかしながら、全体的に見てみれば、排列の制作年順であることをほぼ信頼してよいであろう。なぜならば、「居士集」は欧陽修在世のときに息子の欧陽発(1040―1085)・棐(1047―1123)等が編定したので、欧陽修自身も当然それに何らかの関与があったに相違ない、と推定されるからである。高弟の蘇軾もまたその編纂にかかわったことはかれの「居士集序」に見え、冒頭第一章に記した。のち南宋の紹熙・慶元年間(1190―1200)に、周必大(1126―1204)や孫謙益(生卒年未詳)等が『文集』を編纂するときに、「居士集」にはさらに校正の手が加えられ、新たに「居士外集」が付け加えられたのである。南宋中期のそのころには、校正や排列を考究する資料がまだ多く

存在していたが、歐陽修の死後百年余りを経過しているため、不明の点も決して少なくなかった⁽¹¹⁾。今後、疑問点の解決と年代注記の遺漏を補うためには、歐陽修の散文作品（書簡等を含めた広い意味での文章）の精読、より詳細な伝記研究、そしてかれの周辺にいた他の人びとの作品・伝記研究と関連させつつ、制作年の確定が進められなければならない⁽¹²⁾。ともあれ、目下のところは両集の排列をひとまず信頼して、以下の検討を進めていくしか仕方がない。

第一期は、それまでほとんど地方暮しをしていた歐陽修が、念願の進士及第の夢もかない、はなやかで活気にあふれた西京の文人社会の仲間入りをはたして、人生で最も意気盛んなときであった。

我昔初官便伊洛 我れ昔 初めて官せしとき 伊洛に便ぐ⁽¹³⁾

當時意氣尤驕矜 当時 意氣 尤も驕矜

主人樂士喜文學 主人は士を樂しみ 文學を喜び

幕府最盛多交朋 幕府は最も盛んにして 交朋多かりき

園林相映花百種 園林に相映ず 花は百種

都邑四顧山千層 都邑に四顧すれば 山は千層

朝行綠槐聽流水 朝に綠槐を行きて 流水を聴き

夜飲翠幙張紅燈 夜に翠幙に飲んで 紅燈を張りき

至和元年（一〇五四）に弟子の徐無党（生卒年未詳）が澗池（河南省澗池県）に行く際に贈られた送別詩の中間の一段落である。詩題は「徐無党の澗池に之くを送る」⁽¹³⁾（送徐無党之澗池）。全体に二十年余り前の若き日々をなつかしむ甘美な調子があるのは否めないが、「当時 意氣 尤も驕矜」の句に、かつて政治や文学に若い血をたぎらせた真実の思いがこめられていることは確かであろう。西京でかれが就いた西京留守推官はあまり忙しくない官職であったらしい。それが最

初の句の「伊洛に便くろぐ」である。ひまのある官職を「便官」というその「便」である。そのときの「主人」すなわち西京留守兼判河南府の錢維演であり、錢維演が有能な才子の集うのを楽しみ迎え、みずからも『西崑酬唱集』に名を連ねるほどの文学愛好者であったのを詠ずるのが、第三句目。そしてその次の句では、そのような長官のもとに文才あふれる多くの才子が集まり、河南（洛陽）の幕府は盛況を呈していたこと、その中でかれ欧陽修が真底心を許して交わえる朋友を多く得たことをうたったのである。あとの四句は、青春の快樂の日々を過した洛陽の「園林」と「都邑」の美しい光景と、朝な夕なな楽しかった行楽のありさまである。

もしもこの詩に回想による潤色があると疑うならば、二十年前のまだ洛陽にいたときの、景祐元年（一〇三四）に作られた「懐いを書して事に感じて、梅聖俞に寄す」（書懷感事寄梅聖俞⁽¹⁴⁾）の一部分を読むだけで、当時、全く同じ空氣が洛陽に存在していたことを理解できるであろう。ただし、この詩はその前年の十二月に洛陽を離れて汴京の試験に赴いていた梅堯臣に贈られたもので、冒頭はまず別離のさびしさをうたう。

相別始一歳 幽憂有百端 相別れて始めて一歳 幽憂 百端有り

乃知一世中 少樂多悲患 乃ち知る 一世の中 樂しみ少く 悲患多きを

友と交わる楽しさは、別れてみてはじめて得がたい楽しさであったことがわかるもの。君と別れてはじめて一年、胸ふたぐ悲しみのために心が千々に乱れる。これが、世間には樂しみが少く憂いが多いことを知った初めとは。

每憶少年日 未知人事艱 毎に憶う 少年の日 未だ人事の艱かたきを知らざりしを

顛狂無所闕 落魄去羈牽 顛狂 闕とどまる所無く 落魄 羈牽を去りし

常々思い出すのは、人の世のつらい定めなど氣づきもしなかった若いときの日々。放埒なふるまいは止まるところがなく、つまらぬことにうじうじせず、面倒なしきたりなどみな蹴とばしてしまった。「落魄」はここでは、「落托」「落

拓」と同じく、小事にこだわらない豪放なふるまい。「羈牽」は、ものを繋ぎとめる拘束、人びとをしぼる世間のしきたりをいう。

ここまでは、勝手気ままに生きてきた洛陽以前の生活をうたったもので、次の一段から洛陽で真の友人、知己に出会った喜びを詠ずるのである。

三月入洛陽 春深花未残

三月 洛陽に入りしとき

春は深けれど 花は未だ残らず

龍門翠鬱鬱

伊水清潺潺

龍門は翠鬱鬱

伊水は清らかに潺潺たり

逢君伊水畔

一見已開顏

君に逢うは伊水の畔

一たび見えて已に顔を開く

不暇謁大尹

相攜歩香山

大尹に謁する暇もあらず

相攜えて 香山に歩む

自茲愜所適

便若投山猿

茲より適する所に愜い

便ち山猿を投つが若し

僕が洛陽に来たのは天聖九年（一〇三一）の春三月、晩春になっていたが春の花々はまだ散りもせず咲きほこっていた。龍門のあたりは鬱蒼たるさみどりに覆われていて、清らかな伊水の流れがさらさら音を立てて流れていた。君との出会いは入洛の途中のその伊水の岸边、会ったとたんにつこりと、たちまち肝胆相照らす仲となった。洛陽の長官銭維演公への着任の挨拶もそこそこに、ふたりは手に手をとって香山へ散策に出かけた。このとき以来、心は一つに氣は通じ合い、さながら檻おかりの山猿が自由の世界にとき放たれたかのように、満足を謳歌したのであった。

幕府足文士 相公方好賢

幕府に文士足く

相公は方に賢を好む

希深好風骨 廻出風塵間

希深は風骨を好み

廻かに風塵の間より出ず

師魯心磊落 高談義與軒

師魯は心磊落

高らかに義と軒とを談ず

子漸口若訥 誦書坐千言

子漸は口訥の若きも

書を誦すれば坐らにして千言

その時の河南府の幕府に文才ある士が多く集まっていたが、それも長官の錢公が賢人を好まれたからだ。たとえば希深しやこう謝絳さんは風骨を好み、その人品は風塵の外、神采奕奕えきえきというぐあい。また師魯いんしゆ伊洙さんは大らかな心の持ち主、はるか古代の伏羲氏や軒轅氏のことをよく論ずる人であり、子漸いんぜん尹源さんは一見口べたに見えるが、どうして書物を暗誦しだすとたちどころに千言の言葉が流れ出す。

以上見たように、梅堯臣との遭遇をうたうところ以下が、先きの詩の「主人は士を楽しみ 文学を喜び、幕府は最も盛んにして 交朋多かりき」の具体的な状況である。徐無党の送別詩で詠じられたことがらが決して潤色でも誇張でもなかつたことは、これで明らかであろう。「懐いを書いて……」の詩は、このあと六八句残っていて彦国よこくに富弼以下五人の友のこと、また明道二年（一〇三三）五月に罪を得て洛陽を去った錢維演のことが詠じられ、ふたたび梅堯臣のことにたち返って一首を終束するのであるが、説明すべきことからは十分述べたので、それらは省略する。

この時期のみならず終生、かれが最も苦辛して努力を傾注したのは、詩よりもむしろ古文の創作の方であった。少年のころ随州で勉学に励んでいるときに州の蔵書家のところから借りて読んだ一冊の韓愈の文集がかれと古文との運命的な出会いとなったのであり、⁽¹⁵⁾かれが世に出る契機となったのも古文家胥偃（生卒年未詳）に目をかけられて都の諸公への紹介を受けたからであった。⁽¹⁶⁾そしてまた、この洛陽時代に尹洙を知りえたことがさらにかれの古文創作熱に拍車をかけ、欧陽修と尹洙とは互いに競いつつ切磋琢磨して古文の創作に励んだ。⁽¹⁷⁾

一方、使命感や熱心さでは古文の創作に劣るものの、詩作についても並々ならぬ情熱をもっていたことは、いま残されている詩篇のうちの四分の一ほどがこの時期の作品であることから知る事ができる。景祐三年（一〇三六）以前の作品がすべて在洛時期のものではないにしても、ほとんど洛陽にいたときの作品と推定されるし、⁽¹⁸⁾なによりも詩作には梅堯臣——宛陵（安徽省宣城縣）を故郷とする梅はいうまでもなく南人の一人であった——という心強い同志がいたの

である。たとえば、この時期の詩作に対する積極的な情熱を推測しうる次のような証拠がある。

『文集』にまとめられている「書簡」集の巻六——同巻は梅堯臣にあてた書簡四六篇で一つの巻を構成している——に見える第四篇、明道元年（一〇三二）に書かれた書簡は、梅堯臣から詩が届いた札と、その詩のすぐれているのを讃えたあとで、

公操（楊永節という人物の字——筆者注）諸君の詩がまだ届きませんが、いまは盛んに詩を作って広く諸君に見せてやるべきです。そうしてかれらの作詩を督促しましょう。

と記している。この書簡の言葉からもかれが梅堯臣とともに詩作の活動に積極的であったことが、うかがえるであろう。

一般的にかれの詩作のすべてから言えば、この時期の作品はまだ十分熟成したものとはいえない。特に短い「律詩」の作では、言いふるされた陳腐な表現が目立つようである。しかしながら、「古詩」の作には先にあげた幾つかの作品に見るように、いわば自在にのびのびとした表現が見られ、かれが早くから古体の作詩に長じていたことが理解できる。もとよりそれは、この時期に熱心に進められた古文の創作と無縁ではありえない。概して欧陽修の詩作品には古体の詩の占める割合が多いのであるが、この第一期においても「古詩」と「律詩」の割合は二対三、しかし字数においては無論この比率が大きく逆転するのである。（未完）

注

（一） 香港・新文豊出版公司。初版は一九六三・五、補正再版は一九八四・一〇。筆者の見たのは補正再版本。

同書は上編と下編とにより構成され、上編の「欧陽修の學術与思想」は専ら「治学」についての論考であり、経学・史学・行

政理論・文学・信仰問題が論じられている。これに対して下編は「從政」に関する部分で、「歐陽修与北宋中期官僚政治的糾紛」と題され、政治の各段階に従って、九つの小節が立てられている。

(2) 他に書物の形で公刊されているものをあげれば、筆者の知るところでは以下の数点である。

- a 張健『歐陽修之詩文及文学評論』台湾・商務印書館(人人文庫)、一九七三・一〇初版、一九八二・四再版。
 - b 何澤恒『歐陽修之經史学』台北・国立台湾大学文学院(文史叢刊)、一九八〇・六。
 - c 張華盛『歐陽修』安徽人民出版社、一九八一未見。
 - d 杜維沫・陳新『歐陽修文選』北京・人民文学出版社、一九八二・一。
 - e 施培毅『歐陽修詩選』安徽人民出版社、一九八二・三。前号拙論の注(8)にあげる書と同一。
 - f 李栖『歐陽脩詞研究及其校注』台北・文史哲出版社(文史哲学集成)、一九八二・三。
 - g 陳蒲清『歐陽修文選讀』長沙・岳麓書社、一九八四・七
- 以上のごとく、評伝のc、経学・史学についてのbを除けば、他はすべて文学関係に限られたもので、d—gは詩文の選注あるいは詞に関する研究である。それぞれ書物の目的に従う周到さはあるものの、論述の総合性と精密さの点で、劉子健の書が最もよくまとまっている。
- また、やはり歐陽修の文学について論じた書物であるが、上述の文献(b・c・gを除く)をはじめ広く関係資料を調査した英文の書物がある。詩文と賦と詞について、紹介をかねつつ詳しく論じた書で、文学関係の総合的なものといえるであろう。
- h Ronald C. Egan: *The literary works of Ou-yang Hsiu (1007—72) Cambridge Studies in Chinese History, Literature and Institutions*, Cambridge University Press, 1984.

(3) 同じく劉子健『歐陽修的治学和從政』の「引言」に「このことについての言及がある。

(4) 慶暦五年(一〇四五)に書かれた「岳陽樓の記」。

(5) 『和田博士還曆記念東洋史論叢』所収。同編纂委員会編。大日本雄弁講談社、一九五一・一一。

- (6) 下編・(三) 范吕党争和解仇。
- (7) 范仲淹のことについては、湯承業『范仲淹研究』(台北・国立編訳館中華叢書編審委員会、一九七七・一)がある。
- (8) 欧陽修の生涯を五期に分けるのは、施培毅である。前注(2)のeの施培毅の書の「前言」第二節にその説が見える。筆者の説の第一期と第二期が一つの時期と考えられているほかは、みな等しい。
- (9) 前号の注(1)(2)を参照。ただし、前号において欧陽修の詩作品はすべて八八六首としたが、その数をもう少し増す必要がある。その理由は、宋の呂祖謙編『皇朝文鑑』卷二十七の七言絶句の部分に採録する(三首)ように、欧陽修の「帖子詞」の作品をも数に入れておかなければならないからである。元来は、宋の時代に翰林学士がいわば役職として節氣ごとに作ったもの(清・趙翼『陔余叢考』卷二十四「帖子詞」参照)ではあるが、欧陽修の作品は当時話題にもなり(欧陽発「先公事跡」)当然詩の中に数えなければならぬ。『文集』の「内制集」卷一・卷二・卷六にそれぞれ二〇首づつの計六〇首が収められているので、詩篇の数の総計は九四六首となる。
- (10) 誤りのうち幾つかは、施培毅によって訂正されている。前注(2)・e参照。
- (11) 『文集』の末尾に付されている周必大の「跋」参照。
- (12) たとえば、欧陽修と最も多くの唱和をした梅堯臣の『宛陵先生文集』六〇卷(但し、文賦の一巻を除いた実質的には五九卷)について、朱東潤『梅堯臣集編年校注』三冊(上海古籍出版社、一九八〇・一一)は、編年と校注の作業に欧陽修の作品との対照が重要な作業として行われている。その成果は当然欧陽修の集にも利用できるはずである。
- (13) 「居士集」卷五。
- (14) 前号の第四章にもふれている。また、前注(12)にあげた朱東潤『梅堯臣集編年校注』上冊・卷三の「憶洛中旧居寄永叔兼簡師魯彦国」詩の「補注」に、この詩の背景についての言及がある。
- ついでに記せば前号にあげた詩題の原文中、「慎」とあるのは「懷」の誤植である。
- (15) 「居士外集」卷二十三・雜題跋、「記日本韓文後」。

(16) 前出劉子健書、下編第二節「歐陽的発跡」。

(17) 同右、上編第四節「歐陽的文学」。

(18) 「居士外集」卷一樂府・古詩、同卷五律詩の巻次の下の注記は、歐陽修が洛陽に来る以前の作品をも収録することを明記している。このことから、前号第四章の記述に不用意な点があったので、ここで訂正しておきたい。

前号第四章の二行目に、「いま『文集』に採録されているかれの詩作品で、最も早期に属するのは、天聖九年（一〇三二）、かれが数え年の二十五歳のときに作られた作品である」とあるのは、当然、「最も早期に属するのは」の上に「年代がはっきりと確定できるものうち」の言葉が補われなければならない。